

塘研究室学会参加報告 01

5月23-24日に香川県の香川大学農学部にて、第38回日本土壤動物学会大会が開催され、大学院生の大平君と塘が参加してきました。学会は初日の午後に公開シンポジウム（3題）、その後で口頭発表（8題）、2日目は朝から口頭発表（4題）、その後でポスター発表（26題）、というスケジュールでした。大平君は2日目にポスター発表を行いました。タイトルは「日本産土壌性 *Mundochthonius* 属（カニムシ目：ツチカニムシ科）の分子系統解析に基づく分類学的研究」で、日本各地29地点から集めた試料のDNA解析結果と識別されたクレード間の形態形質の違い、日本産の既知種がどのクレードに該当するか、などについて発表しました。ポスターの発表コアタイムは50分間でしたが、常に何名もの方がディスカッションして下さるほど盛況で、私はコアタイム中に彼とはまったく話ができませんでした。お陰で多くの方から有益なアドバイスやサジェスチョンを頂くことができましたようです。下の写真は、大平君のポスター発表の様子で、大平君の左に写っている白髪の方は日本における著名なカニムシ研究者の一人、東京家政大学の佐藤英文先生です。

私にとって今回の学会で最も印象に残った講演は、初日の公開シンポジウムの兵藤不二夫先生（岡山大学）の「同位体が解き明かす土壤動物の食性とその機能」でした。プロジェクトでも安定同位体比質量分析装置を利用した底生動物の食性解析を進めています。土壌動物の食性の違いが同位体比の違いとして表現できるという話は大変興味深かったです。また、放射性炭素を用いた食性解析が土壌動物の食物源（腐食植物）がかなり古い（約10年前とのこと）ことを明らかにした、という話も大変おもしろかったです。

大平君は学会期間前後に香川県内各地でサンプリングを行い、自分の研究材料である土壌性カニムシ類やオオシマトビケラを採集することができました。また、研究室の後輩（卒研生の林君）の研究材料であるヒメシロカゲロウも河川で採集してくれました。研究用サンプルもたくさん採れ、ポスターではたくさんの方に興味をもって頂き、有益なディスカッションができ、遠路ではありましたが、得るものが多い香川県での学会となったようです。

